

Ⅰ 研究の経過

本校は、昭和53年度に開校し、本年度で20年目を迎える養護学校である。開校以来、「表現化に視点をあてた教育課程の編成」、「豊かな心を持ち、たくましく行動する子」を研究主題に掲げて教育実践に取り組んできた。昭和60年度にこれまでの研究成果と反省を踏まえて、「発達と障害に応じた教育をめざして」という研究主題が設定され、その後副題を発展させつつ、平成6年度まで10年間にわたって研究、実践を深めてきた。

平成7年度から、それまでの主題「発達と障害に応じた教育をめざして」の精神を基盤にすえながらも、新たに「生活を楽しむ子」を研究主題として掲げ、実践に取り組んでいるところである。「生活を楽しむ子」に至るまでの研究経過を、研究主題に沿って概観したい。

1 「表現化に視点をあてた教育課程の編成」（昭和53～56年度）

昭和53年度に、教育目標が「積極的に参加しうる人間の育成」と定められ、その教育内容の選定について検討された。教育内容は、「自立化」、「社会化」、「表現化」、「職業化」の4つの柱をもとにまとめられ、現在の段階別教育内容表の原型が作成された。加えて、研究主題を「表現化に視点をあてた教育課程の編成」と設定し、研究が進められた。

昭和54年度には、副題「——社会的自立をめざす学習指導の研究——」を設定し、各学部で「表現化」との関わりを基本とした指導内容、指導法の研究が行われた。

昭和55年度には、前年度の研究が引き継がれながら、さらに評価についての研究がなされ、その結果各学部の特色が一層明確化されていった。

昭和56年度には、生きていくための生活の基礎づくりに始まり、集団生活への適応、さらには社会的・職業的生活への発展といった、学習内容の段階的発展性の問題が研究の中心課題とされ、特に重度・重複化に対する教育内容が検討され、教育内容表が改訂された。

2 「豊かな心を持ち、たくましく行動する子」（昭和57～59年度）

昭和57年度には、前年度までの研究の成果を継承するとともに、さらに新しい視点を加えるという方針に基づき、新しい研究主題が模索された。その結果、①体力・気力の育成、②養護・訓練の充実、③感受性を育てることという3つの視点を包括した「豊かな心を持ち、たくましく行動する子」という新しい研究主題が設定され、その主旨の共通理解がなされた。

昭和58年度には、小学部では生活単元学習、中学部では生活単元学習と作業学習、高等部では作業学習を中心として研究実践がなされた。

昭和59年度には、前年度と同様、生活単元学習と作業実習を中心として実践が為されたが、そのなかで個に合わせた指導の必要性を痛感するに至った。そこで、指導者一人ひとりが各児童生徒の課題を念頭に置いて、研究実践に取り組んだ。

3 「発達と障害に応じた教育をめざして」（昭和60～平成6年度）

研究主題として、「発達と障害に応じた教育をめざして」が設定された。その主題については以下のように考えられた。

「発達に応じた教育」とは、発達の遅れに対応した教育を指す。知的発達、身体的発達などにおける発達に対して、現在の発達段階を的確につかみ、発達のつまずきや壁を探して、それらを克服したり、乗り越えさせるための手だてを考え、実践する教育である。

一方、「障害に応じた教育」とは、発達の偏りに対応する教育を指す。たとえば、極端な多動や固執、てんかんの発作、脳性まひ児の身体機能における不随意運動など単に発達の遅れという視点だけではとらえられない問題がある。このように問題を軽減したり、矯正したりする教育も必要であり、その意味において、「障害に応じた教育」ととらえている。

しかし、発達の低い段階においては、発達の遅れなのか、偏りなのか区別できないこともある。そのような意味もあり、「発達と障害に応じた教育」というように、2つの内容を合わせた形でとらえられるような主題名を設定した。

さらに、「発達と障害に応じた教育」の中での「応じる」ということばの意味について説明を加えたい。「発達と障害に応じた教育」とは、発達の遅れに対して発達を促進させたり、発達の偏りを矯正・克服するばかりの教育を意味するのではなく、現在備わっている力をどのように生かすかということも重要な課題となってくる。つまり、「応じる」とは、個々の児童生徒の段階における発達の程度、障害の程度を認めたと上で、現在備わっている力をどのように使っていくのか、どのような社会参加をめざしていくのかという現実的な視点も含んでいるのである。

（本校研究紀要11集 PP4～5）

以上のような考え方の基に、3～4年の研究期間で副題を変えながら、「発達と障害に応じた教育をめざして」の研究主題に取り組んでいった。

(1) 副題 ―個に視点をあてた指導の実践―（昭和60～62年度）

昭和60年度には、個に合わせた指導をさらに進めるために「発達と障害に応じた教育をめざして ―個に視点をあてた指導の実践―」という研究主題が設定された。児童生徒一人ひとりについて、そのニーズに応じた個人目標が設定され、その個人目標の達成をめざして研究実践が開始された。各々の教師は、研究対象児を一人決定し、その対象児については、特に詳細な記録をとり、研究することになった。また、グループ研究会を発足させ、共通の問題を抱える教師が集まり、随時討議することによって、教師個人の研究の浅さや偏りが補われるようにした。

昭和61年度は、前年度の研究の構想に基づき、実践が積み上げられた。全児童生徒の個人目標が見直され、研究対象児が新たに決められるとともに、研究グループも新たに発足

した。60年度の反省に基づき、教師一人ひとりの研究が、独断や狭い教育観、指導観によって進められることがないように、個人研究を学部と研究分野別グループの2つの集団で支える方法が試みられた。

62年度は、教師一人ひとりがそれぞれ対象児を決めて事例研究をするという、これまでの形式を発展させ、教師集団で研究対象児を追うという共同研究の方法が採用された。この方法によって、取り上げられる実践事例は減ったが、児童生徒をより総合的、客観的に観察して、より適切な指導ができたというところに成果をみることができた。

(2) 副題 ―からだづくりを通して― (昭和63～平成3年度)

前年度までの研究の成果を継承するとともに、さらに新しい視点を加えるという方針に基づき新たな副題が模索され、「からだづくり」が本校の児童生徒の共通課題ではないかと考えられた。この「からだ」とは、単に身体ばかりではなく、より好ましい身体を作っていくための強い動機づけや必要感、できた身体を使っていく意欲や意志などの精神機能を含めている。

研究仮説として、「からだづくり」を推進していくことによって、「児童生徒が本来持っている能力を十分に発揮し、集中力、持続力、取り組みへの意欲などの高まりによって学習効果をより期待することができる。さらに可塑性の高い生活年齢が低い児童においては、特に、からだづくりをする過程で、全体の発達を促すことができるのではないかと考えられ、「からだづくりを通して」という副題が設定された。

63年度は、全体で研究主題、取り組みの方法についての共通理解が図られ、その後、学部単位の副題のもとに研究実践に取り組んだ。

平成元年度には、小学部、中学部、高等部の研究主題の把握について再検討し、研究の構想図が作り直された。3学部一貫性をもたせるため、実践研究の場、評価の観点、評価法など全学部で討論された。また、めざす「からだ像」について、小学部、中学部、高等部と段階的発展性を考えて設定した。内容的には、前年度までは、体育（保健体育）と「からだづくり養護・訓練」を中心として、からだに直接的にアプローチする実践の場に重きをおいていたが、この年度は、生活単元学習、作業学習など生活場面でのからだづくりにも実践の場が広げられ、取り組まれるようになった。

平成2年度には、過去2年間に築いた研究の構想に基づき、実践の充実が図られた。具体的には、めざすからだ像に迫る授業づくりが、主に「単元・教材の選定と組み立て」と「個を生かす指導の工夫」という観点からなされ、検討・修正されながら積み上げられた。さらに、実践の3分野のなかでも特に「運動場面でのからだづくり」について、3学部の連関が図られた。その中でも、「からだづくり養護・訓練」については、ねらい、運動内容、指導形態、指導方法について分析がなされ、段階的発展性が検討された。

平成3年度は、この研究主題への取り組みの最終年度にあたり、①前年度から本格的に取り組まれた、めざすからだ像に迫る授業づくりをさらに充実させること、②評価法を再検討しつつ、4年間の実践の評価をすること、この2つを念頭において研究実践がなされた。この研究の取り組みによって児童生徒は、からだを動かすことを楽しむようになり、

からだそのものや意欲などに伸びがみられた。

(3) 副題 —コミュニケーションに視点をあてて— (平成4～6年度)

本校の児童生徒は、表現、言語、ことばなどに落ち込みがあることに着目した。この研究では、話し手のことばの力の重要性とともに聞き手側の態度や技術の向上も図っていく必要にも気づいていった。すなわち、よりよい人間関係が、落ち込んでいることばの力を引き上げ、高めると考えた。また、伝達的手段としては、非言語も大切な手段とした。さらに、自分自身の心のなかで対話していくことで、自己抑制や自己実現も図られていくと考えた。これらを含めたトータルなコミュニケーションをめざしていくことが、人間関係を調整する力も育て、本校のめざす社会的自立に近づいていけるのではないかと考えた。そこで、副題を「コミュニケーションに視点をあてて」と設定し、研究実践に取り組んでいくことになった。

研究実践は、授業づくりに中心をおき、その観点を①単元や題材の設定およびその配置、②指導者の関わり方、③個を生かす指導の工夫として研究を進めてきた。

その結果、子どもたちにコミュニケーションを持とうという意欲がみられるようになり、また、伝達しようとする相手が、ごく身近な人から友だちや地域の人というような拡がりもみえてきた。一方、教師側からいうと、教師の関わり方や題材の選定を考えた授業づくりをしていこうという姿勢や、自分づくりの視点で子どもたちの発達を考えていこうという姿勢が見られるようになった。

このような経緯をたどって、現主題「生活を楽しむ子」を設定することになったが、昭和60～平成6年度の「発達と障害に応じた教育をめざして」という研究主題は、われわれ障害児教育に携わるものにとっては、永遠のテーマとして追求していきたいと考えている。この「生活を楽しむ子」という主題のなかでも、従来の研究主題の精神を基盤として、研究の成果を継承し、さらに新しい研究を構築していきたいと考えている。

(倉真理子)